中国文学歳時記

編集委員
黒川洋一
入谷仙介
山本和義
横山　弘
深澤一幸

冬

中国文学歳時記

冬

編集委員
黒川洋一・入谷仙介・山本和義・横山弘・深澤三幸

江苏工业学院图书馆
藏书章

同朋舎

◉編集委員

黒川洋一
入谷仙介
山本和義
横山　弘
深澤一幸

中国文学歳時記　全七巻

◉冬

一九八九年一月一〇日　初版印刷
一九八九年一月二〇日　初版発行

定価　二、五〇〇円

発行者　今田　達
発行所　株式会社同朋舎出版
◉本　社
〒六〇〇　京都市下京区中堂寺鍵田町二
電話(〇七五)三四三―〇六二一
振替・京都五―二二九八二
◉東京支店
〒一〇一　東京都千代田区神田駿河台一―十一―一
電話(〇三)二九二―二〇二一

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　大日本製本紙工株式会社

ISBN4-8104-0663-6　C3398　¥2500E

◉

目次

◉

時候 …… 1

十月 冬の日 南国の冬
小春日和 小雪 雪の朝 山居の雪の夜
暮寒 寒夜 冬の夜 酷寒 歳暮れぬ
歳の暮れ 辺境の歳暮 春を待つ

天文 …… 63

北風 凍雲 冬の夜雨 みぞれ
あられ 冬月夜 雪催い 雪 雪紛紛
雪狂う 夜の雪 雪晴る
辺境の風雪 関山の雪

地理 …… 107

時雨の山路 冬の山路 冬の寺 冬の遺跡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

◉ 生活

……145

―年貢米―炭売り―餳簫―冬の裁縫―冬着―火桶―
―いろり―オンドル―紙帳―雪に酒を酌む―
―雪の夜に茶を煮る―冬の夜の思い―
―冬の夜の読書―冬のまどい―
―冬のあやかし―冬の閨怨―
―雪の日の思い出―冬の貧窮―霜夜の鐘―
―冬の病床―冬の夜宴―冬の再会―
―冬の別宴―冬の送別―冬の旅―雪の旅―
―冬の旅寝―冬の月見―冬の猟り―
―探梅―冬学―年末の感―
―雪の寒村―冬の水辺―寒江―寒汀―氷下の水―
―冬の潮―易水寒し―冬の天津橋―
―十月の江南―冬の揚州―冬の洞庭湖―
―雪中の烽火―冬の火焔山―

◉ 行事……235
冬至 消寒会 臘日 小除夕
餽歳 別歳 除夜 除夜立春 宮中の除夜
役所の除夜 守歳

◉ 動物……273
寒雀 冬の蟹 冬の蠅

◉ 植物……285
松柏 寒梅 つばき 狂い咲き

解説 深澤一幸
詩人索引

時候

十月

旧暦（太陰暦）十月は冬の始まりである。節気は立冬と小雪。秦の王朝ではこの月をもって一年のはじまり（歳首）とした。収穫した穀物を貯え、はじめて口にする。この年の収穫を天子に進め、神や祖霊にそなえる「嘗新」（わが国の新嘗）は、『礼記』月令篇では孟秋に記すが、のちにはこの月の行事となる。『詩経』豳風の「七月」の詩には、この月、「蓂隕つ」といい「蟋蟀（こおろぎ）我が牀（ベッド）の下に入る」という。風物として、残菊（「零落す　黄金の蕊、枯ると雖も香を改めず」、宋・梅堯臣「残菊」）や枇杷の花が詠ぜられ、また寒江に立つ鷺の姿や荻花（おぎの穂）の白さがうたわれる。江南の地方は、豳風でうたわれる北方の中国とは寒気の至るのに一月ほど差があるようで、白居易は「江南　衣を授くること晩く、十月　始めて砧を聞く」（「江楼　砧を聞く」）と詠じている。

陽月・良月・孟冬・上冬

十月（十月）　唐　李賀

玉壷銀箭稍難傾　玉壷の銀箭稍く傾き難く

釭花夜笑凝幽明　釭花　夜笑って幽明を凝らす
碎霜斜舞上羅幕　碎霜　斜めに舞って羅幕に上り
燭龍兩行照飛閣　燭龍　両行　飛閣を照らす
珠帷怨臥不成眠　珠帷　怨臥して眠りを成さず
金鳳刺衣著體寒　金鳳の刺衣　体に著きて寒し
長眉對月鬪彎環　長眉　月に対して彎環を鬪わす

○「河南府試十二月楽辞、并びに閏月」の一首。

水時計の時刻を示す玉壷の内なる矢は、次第に傾くのが遅くなり（夜が長くなった）、灯心の火が夜に花を咲かせたようで闇の中に明るさを凝縮させている。細かな霜が斜めに舞い上ってうすぎぬのカーテンにかかり、渡り廊下の両側に龍形の燭台が並んでいる。真珠のたれまくの中に美人はひとり横たわり、わびしさに眠れず、金色の鳳の刺繍された豪華な着物を身にまとっていても寒々としている。ただ美しく長い眉がむなしく細い月と曲線の美を競っているのみ。

立冬から冬至に至る冬の夜の長さをひとり寝の美人を題材にして詠じている。題材そのものは常套的なものだが、措辞の新奇さとイメージの新鮮さが魅力的である。七言古詩。韻字は傾・明、幕・閣、眠・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

寒・環。

（森瀬壽三）

冬の日

秋が過ぎ、草木が揺落して変衰した後に訪れるのは、死と、冬ごもりと、沈思の季節である。雪と陰鬱な曇天の続く冬の日に、農民は収穫を終えて邑を出でず、役人は倉の貯蔵物を保管し、人々は門戸を閉ざして居宅にこもる。冬の日は、日中の時間が短いために「短日」ともいうが、宋の蘇軾は、その短日の感慨を「冷官は事無くして屋廬深し」と詠じた。屋廬深くにこもる詩人は、白居易が「暖臥、酔うこと陶陶たり」と述べたように、あたたかな帳の中で浅斟低唱し美酒を飲むのを、また一興とするであろう。だが、枯死と沈黙の冬は、『文心雕龍』物色篇に「霰（あられ）雪は垠り無くして、矜肅の慮深し」というように、詩人を、襟を正す厳しい思索へと沈潜させもする。胸にこもる深い憂愁を、冬の陰気にたとえ「気結ばれて言う能わず」と表現したのは曹植であったが、苛酷な自然と熟慮から生まれる詩句は、時に、冬の悲風のように勁く烈々たる悲哀を帯びることがあった。

冬日

復陰（復た陰る）

唐　杜甫

方冬合沓玄陰塞　　冬に方り　合沓として玄陰塞がり
昨日晩晴今日黒　　昨日　晩より晴れしに　今日は黒し
萬里飛蓬映天過　　万里の飛蓬　天に映じて過ぎ
孤城樹羽揚風直　　孤城に樹ちし羽は　風に揚って直なり
江濤簸岸黄沙走　　江濤　岸を簸りて　黄沙を走らせ
雲雪埋山蒼兕吼　　雲雪　山を埋めて　蒼兕吼ゆ
君不見夔子國杜陵翁　　君見ずや　夔子の国の杜陵翁は
牙歯半落左耳聾　　牙歯半ば落ちて左耳聾するを

今は冬、陰鬱の気があたりを幾重にもふさいでいるのか、昨日夕方から晴れたと思えば、今日はまた曇っている。万里のかなたへ飛ぶ蓬は、烈風に吹かれ、低くたれこめた雲に見えかくれしながら飛んでゆく。山の砦にたてられた旗は、風にピンとなびいたままではないか。江（長江）の怒濤は岸をあおり、そのため黄沙が高く吹き飛ばされてゆき、山は雲雪に埋められ、野牛が吼えている。ああ君よ。杜陵を故郷とする旅の翁は、この夔子の国で、歯もなかば落ち、左耳は聾してしまったのだ。

この詩に描かれるのは、いずれも苛酷な冬の自然である。その中で、旅の詩人は歯も落ち耳も聾して、話すことも聞くこともならぬ深い悲憤に閉ざされている。最後の二句は、北風を衝く詩人の叫びであろうか。だが、その叫びには、運命に屈しない詩人の勁さと激しさがあるだろう。杜甫は以前から耳を病んでいたようで、「耳聾す」という詩もこの作と同年（七六七年）の秋に書かれている。七言古詩。韻字は塞・黒・直、走・吼、翁・聾。

十一月四日、風雨大作（十一月四日、風雨大いに作る）　宋　陸游

風卷江湖雨闇村　風は江湖を巻きて　雨は村を闇くす
四山聲作海濤翻　四山　声作り　海濤翻る
溪柴火輭蠻氈暖　溪柴　火は軟らかにして　蛮氈は暖かし
我與狸奴不出門　我は狸奴とともに門を出でず

冬の烈風は江湖を巻きあげ、風にあおられた黒雲が村を暗くする。四方の山はごうごうと音をたて、海の怒濤ははげしくひるがえる。秋の渓で集めた柴はやわらかな焔をあげ、西蕃産の毛布は実にあたたかい。私は、我が家の猫とともに冬籠りして、門を出ないのだ。

詩は、二首連作の第一首で、これのみでは平凡な閑適詩となる。第二首は、「夜闌にして臥して風の雨

を吹くを聴けば、鉄馬　氷河　夢に入り来る」とうたう。金をたおそうと、鉄甲をつけた馬にまたがって氷結した河を渡る自身の光景が、風雨の音とともに詩人の脳裏を去来するのである。陸游は、子供のころから愛国心にもえ、南宋の軟弱外交に不満を抱いて幾度も免官の憂き目にあった。青春の日の激情と夢は、いまだに詩人の魂をゆさぶり続け、冬の嵐は、外界ではなく、むしろ詩人の心の中を吹きあれるのである。第四句にいう「我は狸奴とともに門を出でず」とは、みずからを無能でものぐさな猫にたとえるのであって、そうした激情と悔恨があってはじめて、この詩は人をうつ一首となろう。七言絶句。韻字は村・翻・門。

（高橋文治）

釣魚台の迎賓館（『中国画報』1981－2より）

南国の冬

身をさすような寒風の吹く北方の苛酷な冬に比べ、南国の冬は多少はなごやかといえよう。陸游の詩「歳暮」に「呉中　寒気薄し、歳暮　亦た和風なり」という。呉中は江蘇・浙江あたりをさし、年の暮れであっても冷気は弱く、風もまたおだやかといえた。粤（広西・広東地方）へ行けば雪も稀有であり、珍しく降ることがあれば犬も怪しんで吠えたという（楊万里「荔枝詩」）。そのように柔らかい姿態をもつ南方の自然は、漂泊の旅の沿途にある身、あるいは南方へ左遷された失意の詩人の心を、ときに慰めた。もちろん逆に寂寥感を強め、帰郷の想いがつのることもあった。自然自体は客観的にしか存在しないが、それを見る眼がそれぞれの心象風景を描くのである。

過春秋峽（春秋峽を過ぐ）　　唐　劉言史

峭壁蒼蒼苔色新　　峭壁蒼蒼として苔色新たなり
無風情景自勝春　　風無くして情景自ら春に勝る

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com